昭和33年3月15日　第三種郵便物認可　昭和63年11月15日発行（11月号）通巻第429号　毎月15日発行

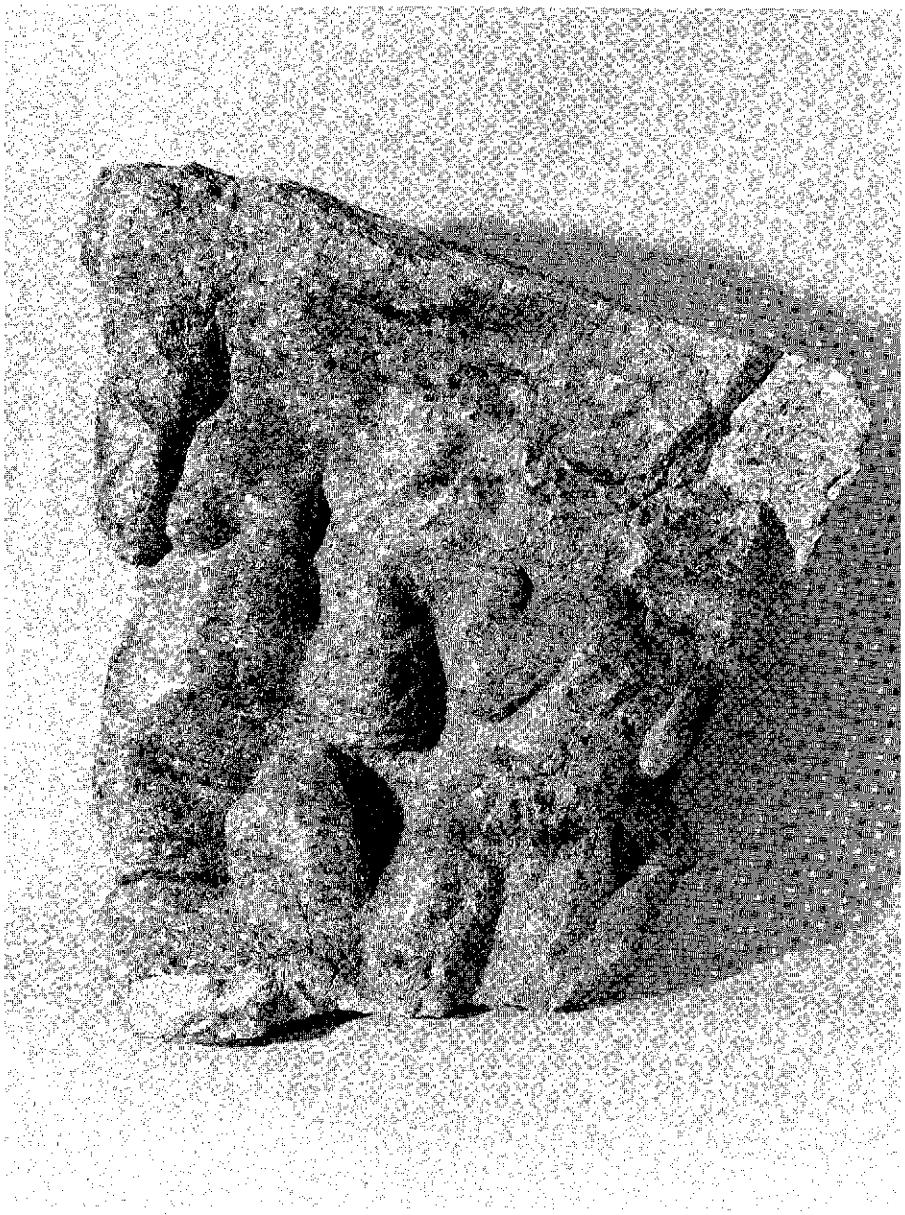
新潟県

公民館月報

63年
11月
第429号

特集　地域づくりと生涯学習その1

—県公民館大会講義（西ケ谷氏）から—



明田川孝「群像」

1955年作
高 52cm　石彫
新潟県美術博物館所蔵

明田川孝（1909～1958）は新制作協会塑造部の創立に参加し、郷里の北魚沼郡広神村近くに産出する蛇紋岩を素材にして多くの彫刻を制作した。また、音楽を好みオカリナの改良普及にも努めた。岩の塊から力強いエネルギーが感じられる作品である。

第39回新潟県公民館大会開催

新時代の公民館の役割を追究

ヒスイの古里糸魚川市市民会館で

伊藤昭雄氏の指揮で「公民館の歌」大斉唱

「生涯学習社会における公民館の役割」を大会主題にすえた第三十九回新潟県公民館大会が去る十月二十日(木)、ヒスイの古里糸魚川市市民会館を会場に開催された。

本県最西端の地にもかかわらず、七百名を超える多数の参加者を得て真しな大会であった。

× × × ×

大会は十時三十分、上越地区公連会長藤本昭雄氏（本会副会長）による開会宣言により開幕。

木下大会々長の開会あいさつに次いで、県教育長（大会名誉会長）星野県公振連会長（大会顧問）から、それぞれの立場での生涯学習社会における公民館の役割の重要性を述べ激励された。

表彰式にうつり、優良公民館（一館）、永年勤続者（十名）に表彰状と記念品が贈られた。また、被表彰者を代表して柿崎町中央公民館長相沢観司氏が謝辞を述べた。

続いて、糸魚川市長木島長右エ門氏が歓迎のあいさつを、市議会議長五十嵐五治郎氏、市教育委員長井伊各量氏から祝辞をいただき、セレモニーを終えた。

このあと、研究集会にうつり、地元根知公民館長山田平爻氏の司会により、実践発表が行われた。

情報機器の学習や操作の習熟をとおして（渡辺優氏＝新井市）国際交流の実践の中から（内山和夫氏＝長岡市）、生涯学習体制を町内に推進中の実践をとおして（吉野晴記氏＝北浦安田町）それぞれ生涯学習推進に真正面から取り組んでいる事例が紹介され多くの示唆を得た。

続いて、大会メーンの講義では、地域づくりに関する権威者の西ヶ谷悟氏から、「21世紀に向けてのパスポートをしっかり持てるように、また、公民館はそのビザの発行所となれるように」と、社会の動向や公民館の進むべき方向を、多くの事例をとおして解明してくれた。公民館への卓越した識見と愛情とを持たれ、全情あふれる説得力のある氏の講義に参加者は厚い感銘を得ていた。

最後に、主管の糸魚川市中央公民館長寺崎直春氏から来年度の大会会場地長岡市中央公民館長近藤義彦氏に大会旗が引き継がれ全日程を終了した。

大会旗の引き継ぎ

県公民館振興市町村長連盟

君県知事へ陳情
生涯教育センターの設置を

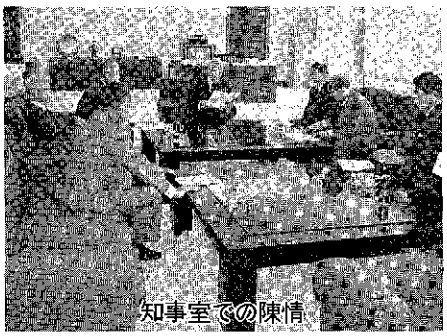
去る十月十八日、県生涯教育センター設置促進委員会（会長星野行男小千谷市長・県公振連会長）では、七名の委員による県立生涯教育センターの設置について、君県知事へ陳情した。

この日、午前十時十五分から二十分間の予定で県知事に面接。陳情書を手渡すとともに、生涯教育センターの重要性について、各委員がこもごも述べた。

それに答えて君県知事は、全国に誇る県立図書館の建設、並びに美術館・体育スポーツ施設の建設構想等すべて生涯教育として一貫した事業に取り組んでいる、と前置きされ、生涯教育センターがこれらの施設機能とどう連携し、相互補完しあうのか、今後十分に検討する必要がある旨の見解を述べられた。

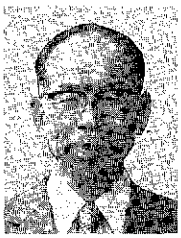
陳情後星野会長は、今後も継続して陳情活動をすすめる必要があろうと語られた。

なお、「生涯教育センター設置促進委員会」は、陳情に先き立つ八月三十一日、県公民館振興市町村長連盟が社会教育関係団体懇話会等と提携し、設置したもので、次ぎの構成委員によって組織されている。


知事室での陳情

会長　星野行男　県公振連会長（小千谷市長）
委員　伊豆野萱郎　〃副会長（両津市長）
委員　小野正毅　〃副会長（吉海町々長）
委員　近　寅彦　〃理事長（新発田市長）
委員　中原八郎　県議会議員（総務文教委員長）
委員　古川　渉　県議会議員（総務文教委員）
委員　松原義一　社団法人社会教育協会会長
委員　小林力三　県社会教育委員連絡協議会会長
委員　木下清一　県公民館連合会会長

辛口



文部省では、七月一日に「生涯学習局」を発足させました。新しい局は、臨教審答申の趣旨を受けて、生涯学習体系への移行をめざして、各種の施策・事業を展開していくとのことであります。

ところで、その臨教審では、第二次の答申のなかで「このため、地域社会を基盤として公民館等の社会教育施設を、自主的な団体・サークルなどの学習活動の拠点として、より一層活用するとともに（略）」と指摘しています。

近年、県をはじめ市町村では、生涯学習について、真剣な取り組みが進められていると聞きます。

いずれにしても、地域住民の自発的で、かつ自主的な共学共習の活動が、生涯学習の基本であると考えるならば、公民館としては、学習団体の育成と援助に努めることが、当面の課題ではないかと思います。

地区研修の機会を

佐藤貞正

私が勤めている坂井輪地区公民館では、現在、定期的に学習活動を続けている登録団体が、百十を数えます。公民館としては、生涯学習を推進するという視点に立って、これらの学習団体やグループに対して、どのように援助・育成していったらよいのか、いろいろと苦心し、努力をしています。

そこで、個々の学習団体の組織や運営・活動の現状や問題点について、他の市町村・公民館ではどのようであるのか、といった情報の交流と、育成方策を協議する機会が、是非とも必要と考えます。

せめて地区段階で、このような研修会を開いて欲しいものです。

（新潟市・社会教育指導員）

第二回編集委員会開催

所属感を深める役割を

十月十一日（月）新潟市中央公民館において、本年度第二回編集委員会が開催された。

協議された主な内容は、「公民館月報」の上半期の反省と、下半期の編集内容についてであった。

特に強調された点は、県下公民館の自主的連合帯である県公連と各公民館との間の連帯感・所属感を高めるために、公民館月報がどのように役割を果たすことができるかにあった。

検討の結果、次のことに力を入れることにした。

①館一事業運動の推進

いうまでもなく、公民館サバイバル運動は、存在感を高めるために極めて重要なことである。よって、この面の情報提供と意識醸成をねらう。

②人物紹介に意を用いる。

「素顔拝見」とは角度を変え、公民館に生きる職員やボランティアの哀歓を紹介し、公民館相互の連携・連帯の意識を深めることをねらう。

講義要旨　その一

地域づくりと生涯学習

―二十一世紀へのパスポートを握ろう―

講師　西ヶ谷　悟（東海大学講師）

一、公民館をめぐる新しい時代の潮流

いま、公民館が最も期待されている役割として、生涯学習と地域づくりとを結びつけながら、十分なお話が出来るかどうか分かりませんが、これからの公民館の飛躍を図り、実践を進めるという意味でご一緒に考えさせていただきます。

1　社会変化と住民意識の変容

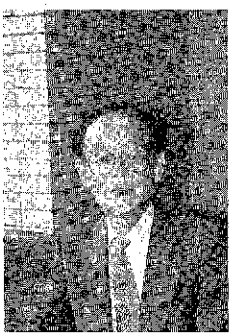
ご承知のように、私どもがいま生きている「いま」は今までの歴史になかった変化の激しい時代であります。変化が常態になっている社会であります。しかも、その変化のスピードは速くなって、ジェット機が十六年前に空を飛ぶようになって、プロペラからジェット機にそしてロケットにとスピード化したように、それと同じように変化が目まぐるしく、しかもスケールも大きくなっています。

日本の地域構造が変わったのは農業基本法が制定された昭和三十五年からで、つまり、農業国から工業国にという政策のもとに社会構造が大きく変わりました。アーバンナイゼーション（都市化）が起こりました。そのころは確かにいろんなものが変わりました。しかし、今日の変化は、その当時の変化とは様変わりした変化であります。

どういうことかと申しますと、これまでの変化はどちらかというと外側に起こっていたわけです。つまり、見えるところで変化していました。それが、最近は内側に変化が起こっています。見えにくい変化になっています。

ご存じのように、あと五千日経たないうちに二十一世紀がやってきます。二十一世紀というのはどういう時代であろうかと二十年前ぐらいからいろんな模索が行われていましたが、最近その前触れが見えてきました。

それは、国際化の波であり、高度情報化の波であり、高度技術化（産業構造変革）の波であります。それから、高齢化、成熟化、余暇化、自由化の波であります。そして、そのどれもが今まで私どもが一度も経験したことのない、新しい課題として大きなうねりをおこしながら押し寄せてきています。そして、それをなんとかクリアーして二十一世紀へゆかなければならないという課題を担っていることだと思います。九年ほど前に、アメリカのアルビン・トフラーが「いまやってきているのは第三の波だ」といいましたが、まさに、第三の波が私どもの暮らしや地域に押し寄せてきております。それが、今日的な人間の課題、地域の課題、「いま」を生きる人間全部が真剣に取り組まなければならない課題だと思います。住民の暮らしも人々の意識もそういう波によって、大きく変わっています。



(1)　**ハードからソフトへ**

今までの社会は、ハードウェアーが価値あるものとされてきました。が、最近は、ソフトウェアーに、つまり、物よりも物を作る知識や技術や売る手法、アイデアなどのソフト面が相対的に価値が高まっています。

広告業者に博報堂という会社があります。そこの生活行動研究所の調べによりますと、わが国は、昭和二十年頃までは、「貧」の時代でした。工業化社会に変わることによって「豊」の時代（三十五年～五十年頃）となりました。いわゆる高度経済成長の時代で、作れば売れる、人は何人でも採用できるという時代でした。その余力で昭和五十年代は「遊」の時代になりました。ディスカバージャパンといい、レジャーやグルメを楽しむ時代になりました。しかし、これからは、豊かに、しかも色を添える、「艶」の時代になるといっています。つまり、「花より団子」の時代から「花が団子を産み出す」時代になるというのです。花とロマンがいま最も人気があります。あと二年で一九九〇年になります。その年を記念して、大阪で「世界花の万国博覧会」を開くことになります。この間松下幸之助さんが、そういうことならと、五〇億円をポンと寄付したというニュースがありましたが、そういう時代なのであります。ソフトがお金になる時代です。これが、ハードからソフトに社会が変わったことであります。

(2)　**マクロからミクロへ**

従来は巨大な変化がおこっていましたが、いまは小さな変化が連鎖反応をしつつ変化をしています。つまり、マクロの変化からミクロの変化に変わりました。産業界はかっては重厚長大型（鉄工、造船、など大きいことはいいことだ）でしたが、いまは、軽薄短小型（先端産業）で手提げ鞄の一つに一億円や二億円の商品が入り、それを持ってジェット機で売りに行くという時代です。

(3)　**住民意識の変容**

世の中の構造が大きく変わっていく中で高度成長から安定成

長の時代に入りました。今までの資源エネルギーを多く使う産業から、省エネルギーで生産をあげる産業に変わりつつあります。今まで大衆社会として捉らえていた世の中は、いまや、分衆化していく社会（巨大な組織がだんだん分化していく社会）へと、また、画一的な生活から個別化・個性化の時代へ、そこにしかないというものが尊重されるようになっています。また、量から質の時代、効率より快適（アメニティ）であることを求め、町づくりも「町に緑を」という時代からさらに「一緑のなかに町をつくろう」という発想になっています。

今まで受け身だった自分が主役になる時代です。コピーより本物が尊重され、演劇も観る側から演ずる側へ、音楽も聴く側から演奏する側へという時代です。うどんや、蕎麦では手打ちが喜ばれる世の中です。そして、マジメよりは遊びごころが、飽食から選食の時代、理性から感性へと変化しています。

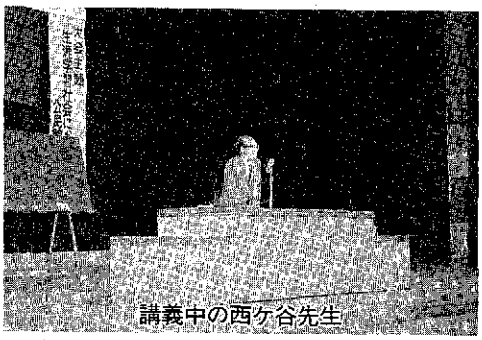
(4) ハイテクとハイタッチの共存

モータリーゼーションの発達によってどこの家にも自家用車があるようになったころからマラソンやジョギングをやる人が増えてきました。自動車で走る快適さと、自分の足でいい汗かいて走りぬく喜びを感じたり、ベークライトやプラスチックでいろんなものを作るようになりますと、それに対応して、木のぬくもりを見直すようになりました。繊維の発達史をみましても、麻・絹・木綿、羊毛そして、化学繊維、石油繊維、洋材木（アセテート）、ガラス（アクリル）、金属繊維と変わる中で、いままた、本物の木綿・麻本物の羊毛というように本物志向が高まっています。農産物でもそうです。流通の進む中で、手作り、手渡し、心渡しの販売方法に人気が高まっています。ワープロは便利なものですが、そこに個性を出そうとするので、もう一度手書きのペン習字や書道を習おうとして和紙や筆・墨などを求める人が増えています。電卓をポケットに入れる時代になって、再び算盤を習おうという人も増えています。このように挙げていきますと、世の中の意識の変化はこんなにまで変わっているのかということがお分りになると思います。とにかく大変な変化が起こっているわけです。

2　公民館の当面の課題

ものの考え方は、二者択一から多種選択へという、大変難しい世の中になっております。大きく言えば、国際化、情報化、などの幾つものハードルがあり、それをクリアーして二十一世紀に幸せに生きなければなりません。

「今をよりよく生き、明日を更により幸せに生きる」決め手は何であろうかと申しますと、その絶対的な決め手は生涯学習であります。また、揺ぎない古里づくりであります。この二つを今の我々が二十一世紀へのパスポートとしてしっかり持たないと、この速さでいくと入国できないことになります。生涯学習がパスポートであり、地域づくりがビザであり、この二つがどうしても無ければならないという時代になってきたわけであります。そして、その二つを発行してくれる場所は何処かと申しますと地域に根ざしている公民館が発行所になると思います。


講義中の西ケ谷先生

こういう時代になればなるほど公民館の本来の意義が求められますし、評価も厳しくなっていきます。公民館は、全国各地に最も普及されており、親しまれて利用されている我が国独自の社会教育の中核機関であります。そして、地域住民の「出会い、触れ合い、学びあい」の場となっています。地域の中の、老いも若きも、男性も女性も、健常者も障害者も、生産者も消費者も、みんながパスポートを持てるように援助する役目が公民館にあるということです。つまり、人間尊重の精神を根底に置きながら、生活福祉が生涯にわたって保障されるような地域社会を作ることが今日公民館に期待されている最大の課題であります。これがかなえられない公民館は厳しく批判されるし、存在感（アイデンティティ）をなくし、使命を失ってしまうであろうと思います。

二、生涯学習の社会的背景と学習需要の動向

学習というのは今更申し上げる必要もありませんが、人間が人間としてよりよく生きるために欠かせない営みであります。

昔から「人間は死ぬまで勉強だ」と言われてきました。しかし、生涯学習というのはそういう発想だけではありません。

今日的な意味での生涯学習は一つには、これまでの長い間の人間の教育活動から導きだされた教育観、つまり、「これからの教育活動として何があるのか」という、新しい教育観であります。

もう一つは、今、人々が大きく持っている、生きがい志向です。自らを高めるために自分の可能性にチャレンジしようとか、創造的な自己啓発をしようという、現実とからみあって生まれてきた教育思潮であります。それは、今をよりよく生きて、次の時代をよりよく生きるための唯一の活路であります。

こういうぎりぎりの主張から生まれたものが生涯学習であり生涯教育であります。今、全国の市町村では、生涯学習体系を整備しようと熱心な研究や取り組みがなされています。それは、一人一人のかけがえのない人生を、能力を、開発し、生命に値打ちを加えていこうということです。そのための生涯学習ということであります。

（以下次号に続く）

県大会印象記

「公民館活動は、人なり」

中村秀雄

公民館に寄せる地域の皆さんの期待と協力は、計り知れないものがあります。

私たち職員は、それに答えるためにも、偏りがないか、マンネリ化していないか、時の流れを見極めているかと常に反省をしながら、活動を繰り返します。

「夢工場なれ、生涯学習」と題した安田町の実践発表は、こうした事からも特に興味深く拝聴しました。

「生涯学習は個人の学習ですが、その学習した先にあるものは住みよいまち造りです。お嫁さんが喜んで来てくれる夢いっぱいのまち造りは、生涯学習で実現できると確信します。」と胸を張って言い切られました。

・毎日の生活を見直して
・問題点を洗い出し
・緊急な課題を選定し
・組織をとおし、解決のために真剣に町民と話し続ける発表者に、心からの拍手を送りました。

公民館活動は、やはり人なりと改めて痛いほど感じました。

県大会当日の秋晴れにも似たさわやかな気分です。

（糸魚川市今井公民館長）

「県公民館大会に参加して」

中藤栄子

本大会の講師である西ヶ谷先生は講演の中で、科学技術の進歩や、社会情勢、社会構造の変化など、いくつかの例を通して説明され、こうした現状を踏まえて、今、公民館はいかにあるべきかという方向を示唆された。その中で印象に残ったのは、「生涯教育・学習の原点は生活にある」といわれたことである。生涯教育は地域に根ざしたものでなければならない。したがって公民館で学んだことを、地域に放電し「共に生きる」豊かな社会を作ることにあると。

現在のカルチャー志向の強くなった公民館活動を見るとき、私には生涯教育という言葉に理解し得ない一面があった。しかし、それはこの大会で解けた。そして思った。このような時であればこそ、公民館の性格、役割を明確にし、その機能を充分に果たしていただきたいと、その上でインテリジェント化を進めていくべきではなかろうかと考える。今後の公民館の運営に期待したい。非力ながら私も公民館と地域のパイプ役として、又、人と人とのネットワーク作りを続けていきたいと思う。

（新潟市中央公民館運審委員）

「企画や運営の妙に深い感銘」

加藤輝夫

快い朝風の中を車を走らせ二時間で糸魚川に至る。会場は万端整って、歯切れのいい、さわやかなペアの進行で開会式が行われ、引続き大会主題に沿って実践発表に入る。

近年、情報化や国際化等の社会情勢の変動に伴い、地域住民の要求も多様化・高度化しているだけに参会者も熱心に耳を傾ける。「情報学習の推進」発表は、わが公民館でも本年度後期実施を計画しているので殊更に注目したが、機器や応用の面で計画の再検討を促されるようである。「国際交流の実践」についても、今月初め「寺泊女性セミナー」として、三ヶ国の外人留学生による「国際交流懇話会」を開いた後だけに、企画や運営の妙に深い感銘を覚えた。

西ヶ谷先生の講演は、異質の事項を対比させながら、博覧強記、ユニークな話術で九〇分間聴衆を魅了した。「地域を深く知ることが国際化の前提である」「生を活かしながら社会変化に対応する」「自己充電を地域に放電する」等々の金言を家づとに、満ち足りた気分で会場を後にした。

（寺泊町社会教育係長）

第三九回県公民館大会に参加して

中川七三

新潟県の西端糸魚川市に県公民館大会が開催されたことは、道路網の発達によると印象づけられました。また、参加者は年々高齢化が進んでいますが、このような大会に出席し交流することは大切なことと思います。しかし、実践発表者が三〇歳代の若者層となり、発表内容も「情報化時代における学習活動」「国際化社会での公民館事業」「公民館は生涯教育をいかに進めるか」などの発表は、まさに私たちの時代感覚では想像もつかない、新しい時代の公民館事業であることを強く感じさせられました。

更に、講師西ヶ谷先生の「地域づくりと生涯学習」の講義は、先生の年代を感じさせない迫力と、実践を通じての理論づけによる『公民館の生涯学習を通じて、社会を変革することができる』と自信にみちたお話しは、参加者に深い感銘をあたえました。さらに、文化的うるおいと活力のある地域づくりは、新しい時代の潮流であり、この事業の達成は公民館であればこそできるし、それが役割でもある。また、公民館事業活性化の原点でもあると力説された。とかく、会議用員的な公運審委員である私にとっては大きな起爆剤となりました。

（亀田町公民館運営審議委員）

下越地区公民館関係役職員研修会

生涯教育と公民館の役割を追究

両津市のホテルを会場に

下越地区公連では、去る九月一、二日の二日間にわたり、下越地区公民館関係役職員研修会を両津市内のホテルを会場に開催した。

主題を「生涯教育と公民館の役割」におき、第一日は、三人の実践事例発表、三分散会に分かれての研究討議。第二日は、前日の研究討議に対する指導講評に続いて、田中圭一氏（筑波大教授）による『佐渡の歴史と文化』と題する記念講演、午後は施設見学（新穂村歴史民俗資料館・両津市博物館）と密度の濃い研修会であった。

研修会の特色は、実践発表は全体会で、意見交換は分散会でという方式のため、全員が発表を聞き、問題を受けとめることができ、きわめて有意義な研修会であった。

三氏の事例発表から、要点を紹介しておこう。

一、山北町公民館の主な事例と問題点

発表者は山北町公民館の佐藤久恵氏。レジュメの他に、発表資料（B5判一〇ページにわたってびっしり記載した資料と館報）を用意しての発表で実践内容が浮き彫りとなり、それだけに問題点もよく理解できた。三事例のうち、家庭教育学級に触れると、これまでのやり方には、ややもすると小学校や保育園のPTA研修的な運営になりがちな傾向から、部落ごとの開設にして、地域ぐるみ学習にすることができたという成功事例であった。その英知と努力に敬威を表する。

事例発表スナップ

二、両津市における公運審の現状と問題点

発表は両津市公運審委員長の小林寿雄氏。委員長であるだけに、現状と問題点を思いきって発表されていた。住民のニーズを知るためのアンケートの実施など精力的な取り組みをしている一方で、委員の個人個人は住民の要求をどう吸い上げたらいいのか。また、生涯学習に対応するための公民館の役割が変わってきているが委員はどう対処したらいいのか、などの問題を提起していた。両津市だけでない問題である。全県的に、さらに、公運審のあり方について情報交換や研修を深める必要を感じた。

三、生涯学習と公民館の役割

発表者は真野町の社会教育係長本間裕亨氏。

生涯の各期における学習は公民館で実施しているが、学習は本来的には個人のものだから、「家庭で学習を進める」ように、あるいは「地域の問題をテーマにした学習」への呼びかけなど、行政としての推進体制を急がねばならない。

そのためにも、佐渡島内の広域的な社会教育の実施、情報交換等を展開することを提言していた。今後の成功を祈る。

（上村記）

素顔拝見

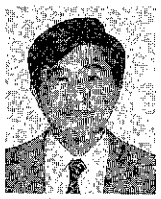
中之島町社会教育係長 入沢 与吉氏（41歳）

九月七日、浜松市での関ブロ公研集会で同宿の機会のインタビュー

―公民館の仕事をするようになって何年になるんですか？

「三年目。とはいっても行政（社会教育）との二刀流ですが」

―どういう事業に力を入れているんですか？



「社会教育の仕事を三人で手分けして取り組んでいるんです。学級や講座に関すること、文化・芸能部門、社会体育の三部門。ですから、特にどれということでなしに、みんな力を入れなければならないんです。そこが大きな市と違うところでしょうね」

―それは大変ですね。あす、町へ帰るとどんな仕事が待っているんですか？

「十一月に実施される町民祭の準備です。菊花展・芸能発表など、いくつもの発表会をまとめた総合的な町民祭です。町民の期待しているものだけに力が入ります」と。（上村記）

山古志村公民館主事 斎藤 末松氏（35歳）

山古志村は人口三千人の山村。部落が散在している上に山坂が多いので、出向く公民館主事にとってはなかなか大変である。体力的にもそうだが、村全体の事業を展開する上でも大変である。斎藤さんは公民館勤務二年目の新進気鋭。社会教育のことが分かってきた段階と見た。

―いま感じていることは？

「小さな村なんですが、部落によって、それぞれ違いがあるのがよく分かるんです。地域の特色を肌で感じられるんです…」と。

―今、手がけていることは？

「銀婚式講座かな！高齢者に呼びかけて、講座を受講してもらい、その講座（学習）を続け、終了したあと、銀婚式を迎えるようにしているのです。とても盛況ですよ。」「この講座のねらいは、やがて迫り来る高齢期への準備としての意味を持っていることが特色なんです」と自身をもった答えが返ってきた。一層の健闘を祈るや切。（上村記）

ネットワーク

調査結果に見る本県公民館の実情

その三　施設設備の充実

公民館は地域における社会教育の中心的施設であり、「公民館の設置及び運営に関する基準」（昭和三四、文部省告示）によれば建物の面積は三三〇平方メートル以上が望ましいとされている。また「同基準の取扱いについて」によると、公民館事業の対象となる区域は一六平方キロメートル以内が利用の効率がよいとされる。この基準に基づいて、県は市町村の実態を十分考慮しながら、指導に当っているが、ここでは本館の設置状況について述べる。

昭和五五年と六三年の公民館施設設置状況について、公民館数・規模・構造の三つについて比較考察してみよう。

一、本館数が全県で三九館増えたがそのほとんどは地区館であり、分館から格上げしたものである。（第一表参照）

二、規模別比較では、基準に満たない三三〇平方メートル以下の公民館は三五館と半分以下になっていることは、望ましいことである。

第1表　公民館設置数（本館のみ）

	中央館		地区館		合　計	
	55	63	55	63	55	63
上越	22	22	41	45	63	67
中越	35	35	42	70	77	105
下越	43	43	49	56	92	99
佐渡	10	9	9	10	19	19
合計	110	109	141	181	251	290

専用施設なしが七一館と著しく増加しているが、教育機関としての公民館の在り方から考えると検討を要する課題である。

第2表　規模別設置状況（専用施設を有する公民館）

規模	330m²未満		330m～1000		1000m²以上		合　計	
年度	55	63	55	63	55	63	55	63
単独	22	11	85	95	22	25	129	131
複合	53	24	30	34	31	30	114	88
合計	75	35	115	129	53	55	243	219
専用施設なし							8	71

第3表　構造別設置状況（専用施設を有する公民館）

規模	33m²未満		33m²～1000		1000m²以上		合　計	
年度	55	63	55	63	55	63	55	63
木造	55	23	44	30	6	3	105	56
鉄筋	18	9	56	71	41	48	115	128
鉄骨	2	3	15	28	6	4	23	35
計	75	35	115	129	53	55	243	219

（第二表参照）

三、構造別では、木造が減り、鉄骨・鉄筋が少し増えているが、施設の近代化を目指していると思われる。（第三表参照）

公民館の設置については、人口の過疎・過密で公民館が適性に配置されているか、類似施設との関連をどうするか等、今後検討すべき課題であろう。

（県社会教育主事　中村正臣記）

あとがき

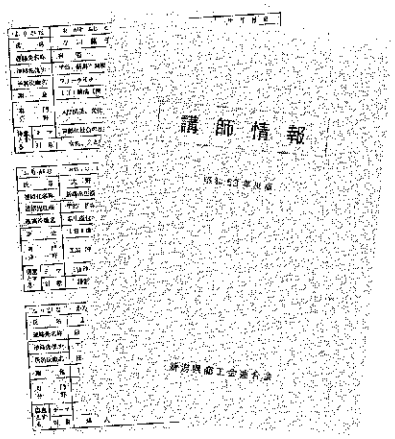
◆当県公連の中興の大恩人といえる元会長石井耕一氏（前豊栄市長）は、長年の地方自治に功労があったとして、勲四等旭日小綬賞の叙勲の栄に輝きました。まことにお目出たいことであります。石井氏の栄誉であるばかりでなく、我等県公民館人の誇りでもあります。衷心からお祝い申し上げます。

（上村記）

資料紹介

講師情報

新潟県商工連合会



このほど新潟県商工連合会から『講師情報』という名の情報資料誌の恵贈をうけた。

県内外の講演講師を紹介したものであるが資料作成が商工連合会であるだけに、講師の専門領域は商工業に関する内容が多い。だが評論の部分に教育関係者が掲載されている。

県外講師は、山形県・富山県・長野県・その他となっている。県内五九名、県外一八二名が載っており、各人ごとに、氏名・生年月日・連絡先名称・所属役職・専門分野・得意とするテーマ・対象が記載されている。その上、謝金の額が記載されているのも便利である。例えば、一日一講演二万円とか、三万三千三百円（三万円に税金を上載せした額）などのものもある。

公民館の講師は必ずしも教育者とは限らないから、参考となる資料であろう。

発行所　新潟県公民館連合会
【新潟市川端町2－9・県林業会館内】
【電話・新潟（025）224－6073】
発行人　会長　木下清一
編集人　事務局長　上村拾二郎
【定価1部 120円 〒共・年極 1,440円】